

シカゴ黒人ゲトーの黒人教会

竹 中 興 慈

一 はじめに

第一次大戦期に南部からシカゴへ大量に流入した黒人たちは不案内な都会での生活を始めるために様々な組織から援助を受けた。困難をかかえた黒人女性や病気の黒人のためのホームや病院、黒人YMCA、黒人YWCA、セツルメント・ハウス、またいくつかの教会が大移住期以前から移住者を援助していた。一九一〇年に設立された黒人フェローシップ同盟は二晩一五セントで泊まれる宿舎を提供し、雇用斡旋係を置き、南部の新聞も読める読書室を持っていた。一九一六年結成のシカゴ都市同盟も、雇用斡旋、住宅斡旋、ソーシャルワークで、事務所開設八ヵ月で七〇〇〇人の黒人に何らかの援助を行い、一九一九年までにその数は二万人以上に増大している^①。

黒人たちは北部へ移住したからといって南部との文化的

絆を断ったわけではなかった。移住してきた黒人は残された家族や親戚、知人とのネットワークを維持し、故郷におけると同じように歌い、南部料理を食べ、衣服を着たのである。また、シカゴの地で州別の同郷人クラブを作った。そのメンバーの多くは大移住期以前からシカゴに居住していた黒人だったが、これを母体に黒人政治家を支援したり、新参者のために様々な情報を提供した。移住者によって作られた組織のなかでも、もっとも重要な組織が教会だった。ところで、筆者の知る限りでは、黒人宗教あるいは黒人教会の歴史について包括的に論じた著書はそれほど多くないが、黒人教会の研究にはおよそ四つの方向性があるように思われる。その第一は同化論の立場に立つもので、代表的研究者はフレイジアである。彼は北部の都会生活の厳しさを強調するあまり、都市に來た黒人は南部との絆を断ち切ったため「黒人生活の伝統的社會組織の都市における崩

壊」をもたらしたとする。そして、その最大の問題は、かつて「敵対する白人世界からの逃避所であった教会」が俗化したり、異教崇拜（カルト）へと向かっていることにあると考える。このように変化し黒人教会は「黒人の統合と同化のもっとも重要な障害になり」、アメリカ黒人の「遅進性の原因」となっていると考える。この白人中産階級の見解を基軸にした黒人教会に対する評価は明らかに誤っていると言わざるをえない。

第二の研究方向は、ドレイク、ケイトン、ミュルダールの代償論と呼べる見解である。③彼らは、黒人教会を隔離され、抑圧された人々に対して社会生活の機会を与える場と捉え、教会内での民主主義的側面や柔軟性を強調はするが、ミュルダールの言うように、この隔離された組織は「病理的」性格として捉えられるのである。白人社会、白人教会から締め出されたために、黒人は止むを得ず、黒人教会を組織したとの見解である。しかし、この見解では、黒人が生きぬくために独自の組織を作った主体的側面が十分捉えきれないと言わざるをえない。

第三の研究方向は、エスニック・アイデンティティー論と呼べる見解である。③この見解はメイズとニコルソンによって発展させられた。彼らによれば、黒人教会は白人キリスト教の腐敗に対してエスニック・アイデンティティーを形

成する基盤として重要な役割りを果たした。黒人教会を積極的に捉えようとするこの見解は、その後、フレイジアやミュルダールらによる研究が支配的だった間、無視されていた。ただ、黒人をマイノリティやエスニックグループと同列に捉えることには問題があった。

第四の研究方向は、公民権闘争やブラック・パワー運動に影響され、教会の現世性や戦闘性をその歴史の初めから評価しなおそうというものである。これには、ネルゼン夫妻の研究や、ごく最近ではマンニング・マラブルの研究がある。③彼らにより先のメイズとニコルソンの研究が再評価され、黒人教会の二重性、すなわち黒人たちを励ます側面と麻痺させる側面の両面に正しく注目されるようになった。筆者は黒人宗教を考える場合、この二重性を統一的に捉えることが重要だと考える。本稿では、大移住期のシカゴに焦点を絞り、黒人教会の二重性、換言すれば来世性と現世性あるいは保守性と革新性、のうち主に現世性、革新性に着目し、黒人たちが黒人ゲトローのなかで生きぬくために、彼らの独自組織として主体的に形成した教会の役割を検討することにする。

二 増大するシカゴ黒人教会

アメリカ全体の黒人宗教組織は、一九〇六年の三万六七

シカゴ黒人ゲトの黒人教会（竹中）

七〇から一九一六年の三万九六五五、一九二六年の四万二五八五へと増加している。なかでも北部の増加は特に注目値する。組織数では、いまだ南部が圧倒的に上回っているが、一〇年毎の増加率では、一九〇六―一六年には全米七・八パーセント、南部八・一パーセント、北部二・四パーセントと南部の高さが目立つが、一九一六―二六年には、全米七・四パーセント、南部四・〇パーセントに比べ、北部では実に四二・三パーセントという大きな増加率を示している。

この傾向は教会員数にも明確に表れている。その数は、北部では一九〇六年の三〇万一〇六七人から一九一六年の四十四万五二五七人、一九二六年の八十七万五七四八人へと増加しているが、増加率では、一九〇六―一六年には全米二四・九パーセント、南部二二・七パーセント、北部四七・九パーセントであり、一九一六―二六年には全米一三・一パーセント、南部三・五パーセントに比べ、北部では九六・七パーセントと大幅な増加を示している。北部の黒人宗教組織数、教会員数ともに一九一六―二六年の間に大幅な増加を示している。この著しい増加傾向は、黒人の北部への大量移住の影響と考えられる。

この時期の黒人移住の最大の目的地シカゴの所在するイリノイ州ではどうか。教会数では、一九〇六年の三五九か

ら一九二六年の三四八へと若干の減少を示しているが、一〇年後には五二三になり、この間の五〇・二パーセントの増加率は北部の宗教組織のそれを上回っている。教会員数では一九〇六年の五四四二人から、一九一六年には一挙に四万九六三三人へと増加し、一九二六年にはさらに大きく一三万七一一一人へと激増している^⑦。

シカゴ市内の黒人教会数と教会員数については公式統計が利用できないが、一定の信頼できる数値は得られる。一九一九年のシカゴ人種暴動の原因を究明したシカゴ人種関係委員会の調査報告書（一九一九年一月から一九二〇年にかけて調査）によれば、一七〇の黒人宗教組織があった。一九二八年については二つの数値がある。一つは通りごとの調査を行なったサザーランドの二七八、十年後にブロックごとの調査を行なった資料に基づいたドレイクの二九五である。シカゴ人種関係委員会の報告書によれば、訪問調査した一四六の宗教組織のうち六二の教会員数は三万六八五六人だったので、シカゴの黒人人口の三七・七パーセントがこのわずか六二教会の会員であったことになる^⑧。

ところで、これまで宗教組織ということばを使用してきたが、それには理由がある。つまり、教会という場合、我々がふつうイメージする建物を持っている組織とそうでない組織がある。建物を持っていない組織の場合、使用されな

くなった「商店」や、「住宅」を月数ドルで借りて礼拝等の集会を行なうのである。その場合、ふつう「店頭」教会とか、「住宅」教会と呼ばれ、これらの総称が「店頭教会」である。教会組織を作ったばかりの初期段階には、ほとんどの教会がこの形式をとり、教会員数が増え、寄付が集まるにつれ、教会の建物を建造したり、別の宗派の教会の建物を購入するのである。したがって、センサス等の統計で宗教組織という場合、建物を持つ教会組織と、店頭教会のように礼拝場所があまり明確ではない教会組織の両方を合計したものということになる。

シカゴ人種関係委員会の報告書によれば、バプティスト派には三の宗派があり、そのうち一九が正規の教会で、六七が店頭教会であった。メソヂスト派には五の宗派があり、そのうち正規の教会は二で店頭教会は二三であった。長老派は二が正規で、店頭教会も二であった。その他、監督派、会衆派、ディサイプルズ・オヴ・クライスト派はそれぞれ正規の教会が一つずつで、セインツ派、ホーリネス派、ヒーリング教会派はいずれも店頭教会で二十あった。したがって、正規の教会組織は四五、店頭教会は一〇二であった。店頭教会はバプティスト派に多いことが分かる。^③ドレイクによれば、一九二八年にはバプティストの三宗派の教会（第一グループ）は二三あり、メソヂスト派

（第二グループ）は三五、本来白人宗派である九宗派（第三グループ）が二一、コミュニティー教会派（第四グループ）が三、ホーリネスグループ派（第五グループ）は五六、スピリチュアリスト派（第六グループ）一七、その他（第七グループ）二九の合計二九五の教会があった。ただし、店頭教会の区別はなされていない。^④

第一グループのバプティスト派の場合、神の啓示を受けた者は誰でも聖職につき、説教を始められ、その意味で各教会が自決権を持っている点に大きな特徴がある。もちろん、個々の教会のなかでの規律は厳しく、そのために不満を持つ教会員が別の教会を設立することもある。第五グループのホーリネス派の幾つかの教会は、事実そのような経緯をたどったものである。このホーリネス派は、現世において直接聖霊の導きを受けることができ、叫んだり、癡癡したり、踊ったりする深い危機の経験は聖霊の仕業と考える。人は現世において完全な生活を送ることができるという熱烈な信仰はビュリタンのである。この宗派の教会員は経済的な地位の低い者が多い。

第二グループのメソヂスト派は、一九世紀初期に白人宗派から独立して設立した古い伝統を誇っているが、教会会議の年次大会には黒人隔離の激しいこの時期においても代表が白人と肩をならべて出席するので、個々の教会員は

まったくメソヂスト監督教会の一員と考えている。厳しい規律と中央集権化された教会組織を持っている。様々な理由でこの宗派を離れた人々が設立したのが第四グループのコミュニティー教会派で、あらゆる宗派から独立している。第三のグループの黒人の通う白人教会のなかには黒人の教会員を増やそうとしたものもあるが、大部分は黒人の出席が極めて少ない。第六グループのスピリチュアリスト派は水晶玉の透視やトランプ占い、死者との交信をしたりする、フレイジア言うところの異教崇拜（カルト）にあたる。これらの多くの多様な教会が、シカゴの黒人ゲトに散在していたが、その所在地にも一定の傾向が見られる。つまり、店頭教会はシカゴ市のサウスサイドの北の部分、ウエストサイド、ノースサイドに大半が存在していたが、この地域はとりもおさず、低所得者の居住地域だった。

三 都市への適応と黒人教会

南部各地からシカゴへ大量に流入してきた黒人たちは、決して円滑に都市に順応したわけでもなく、またいづれかの教会にすぐさま所属したわけでもなかった。彼らの大都市への適応には多様な形態があったが、その中心的役割を担ったのが黒人教会だった。

シカゴ既存の黒人教会も新参者を教会員にするために特別な努力をしていた。一九一七年から一九一八年にかけて黒人紙シカゴ『ディフエンダー』は、毎週教会の「新参者歓迎」とか、「初めての方歓迎」、あるいは「どなたも歓迎、くつろぎます」という広告を掲載した。また、シカゴで古い歴史を誇るオリベット・バプティスト教会の多様なコミュニティー活動のなかには雇用幹旋部、住宅・貸間幹旋部、保育所があった。同教会は一九一六年から一九一九年にかけて五〇〇人以上の新しい教会員を迎えて、世界で最大の教会になっている。小規模のウォルターズ・アフリカン・メソヂスト監督シオン教会も一九一九年までに三五一人の新教会員を獲得して三倍以上になっている。

しかし、既存の教会への参加はしばしば一時的なものだった。多くの移住者は既存の教会では落ち着けなかった。それは教会の規模や礼拝のスタイルと関係していた。一九二二年にアラバマからやってきたメアリー・フラーノイは到着したその週にオリベット教会へ行くが、「私たちはなかに入れませんでした。……どんなに早く行くことも気になりませんでした。……なかに入れなかったのです。」また、移住者の大部分を占めた南部農村出身者にとっては、即興的な歌や叫び（シャウティング）その他の活発な参加形態や熱狂的な雰囲気を伴う礼拝がふつうであった。したがっ

て、礼拝中立ち上ることさえ禁じたベリーアン・バプティスト教会のブラッデン師のような知的な説教には違和感を持った。^③

シカゴの大半の牧師たちはこのような伝統的な熱狂的雰囲気^④を許してはいたが、権威のある教会の牧師の多くは、ウォルターズ・アフリカン・メソヂスト監督シオン教会のブラックウエル師のように会衆を情緒的に熱狂させる南部の牧師のやり方を時代遅れで、洗練されておらず、困ったものだと考えた。オリベット教会に参加したことのある一女性^⑤は「牧師や彼の言っていることが理解できなかった」し、同教会の「歌は高くとまったものだ」ということがすぐに分かり、もっと小さな教会へ移ったと回想している。アラバマ州とジョージア州からやってきた移住者のあるグループは、「変な目で見られずに歌え」る教会が必要だと答えている。ルイジアナ州から来た新参者の一人はピルグリム・バプティスト教会で同じようにくつろいだ気分になれなかった。なぜなら、「誰も大きな声で何も言わず、あちらこちらでささやくばかりだった」からだ^⑥。教会に通った移住者は南部の教会のように一人一人が周囲から認められないことに、さらに違和感を持った。最初通った教会を離れたある女性はその理由をこう述べている。その教会は「あまりにも大きすぎて、力のない人々に目が

行き届きません……説教師は私のことを知ろうともしないし、せいぜい名簿から名前を呼ぶくらいで、それ以上は私のことを知らないのです。故郷では、日曜学校を休んだときはいつでも、彼らは私がどうしたのか家に尋ねてきてくれたものです。」故郷の教会で重要な役割を果たしていた人々にとって、シカゴの教会におけるこのような扱いはとくに意に沿わないものだった。^⑦

最初大きな教会に加わるが、まもなく移住者たちはもっと親密な会衆の教会へ移るか、別の主要な教会へ変わるかを判断するようになる。シカゴには宗派だけではなく、スタイル、規模に関しても極めて多様な教会が存在した。移住者はサウスパーク・メソヂスト監督教会のような、大移住期以前にミシシッピ州出身者によって設立され、一九一九年には二五〇〇人近くの会衆に増大していた教会に通うこともできたし、シカゴに長く居住している中産階級の黒人が大半を占める知的な説教をもっぱら行なう教会に入ることもできた。住宅街で夜遅くまで叫んだりする礼拝集会の騒がしさに対して『ディフエンダー』紙は「いらだたしいだけでなく、間違いないく有害であり、中止されるべきであり、できれば禁止すべきである」と書いたが、このような奴隸制時代からの礼拝様式を守るセント・ジョン・アフリカン・メソヂスト監督教会のような小さな教会を選

シカゴ黒人ゲトの黒人教会（竹中）

ぶこともできた。また、現世における聖霊の働きを信ずるホーリネス派に入ることもできた。

何人かの牧師が「教会渡り」と呼んで嘲笑したことからも分かるように、多くの移住者が教会を渡り歩いた。このような行動は移住者がシカゴに来て初めて可能になった。

南部農村地帯の村や町では、コミュニティ生活における教会の役割の重要性からして、既存の特定宗派の教会以外に選択の余地はなかったからである。あるバプティストの牧師によれば、一〇人のうち九人までが教会の移籍証明書も持たずに教会に来ていた。ある女性はこのように回想している。「私は」バプティストとして育てられた「のですが」、ここに来たとき、彼らの礼拝が好きになれず、教会から教会へと回りました。しかし、どれもみな同じでした。「カム・アンド・シー・バプティスト教会からホープ・ウエル・バプティスト教会へ移り、結局あきらめ、ニュー・ガリリー・バプティスト教会を組織した移住者もいる。シカゴでは移住者は慎重に教会を選択したのである」。

同郷の人々や他の不満をいだく人々とともに自ら会衆を組織した人もある。新教会設立には幾つかのパターンがある。一つは、南部で一緒に礼拝していた男女から主に構成されたもので、牧師と一緒に移住してきたもの、ミシシッピ州ハッティスバーグから来たロバート・ホートンのよう

に後になって牧師を呼び寄せたもの、クライスト・テンブル・ミッシオン教会のように南部の教会の分派として再建したものもある。また、モニュメンタル・バプティスト教会のように、同じ州出身の人々を結集する力のある牧師を見つけて店頭教会を設立する例もある。ジョージア州ウィルクス郡の移住者の「ドレクセル・クラブ」のように、同じ郡の出身者がクラブを結成し、それが教会設立の母体になることもある。

ところで、メイズとニコルソンが述べているように、「アメリカ的生活の他の領域に大きく加わることをあちらこちらで締め出されたためにもっぱら教会を設立したので、たくさん黒人教会があると理解することは……少数派による生存のための闘いの評価を誤ることになる。」なるほど、シカゴへやってきた黒人移住者たちは様々な抑圧を白人社会から受け、ほとんど黒人ばかりが居住するゲトのなかに住むことを余儀なくされ、そのために蒙った不当な不利益や不便さはかり知れなかった。しかし、アメリカ生活の他の領域から締め出されたために、止むを得ず教会を設立したのではない。彼らは南部から来たために、職を変えざるを得なかったり、生活様式の変化、地位の変化には大きなものがあつた。それゆえ、彼らはもともと自分にあつた教会を見つかったり、自ら新たに教会を設立してシカゴ社

会に適應しようとしたのである。つまり、この教会の選択は都会生活への適應に多くの便宜を与えただけでなく、その行為自体がまさに、北部において状況を改善したいという彼らの希望を象徵する、社会への適應のプロセスそのものだったのである。

したがって、彼らには、宗教や教会は決して現実からの逃避ではなかった。教会は聖歌隊は言うに及ばず、多くが貧困者の救済委員会を持ち、日曜学校、様々な運動クラブ、手工芸や演劇クラブ、絵画クラブ等、多様なコミュニティ活動を展開し、彼らのシカゴ社会への適應を援助した。多くの教会の礼拝で語られる来世的な説教とは別に、ある話者が語ったように、まさに「宗教は実践的でなければならぬ」かった。それはシカゴのゲトーにやってきた黒人たちが教会に求めた要求そのものだったからである。もちろん、彼らは教会のなかで解放された。教会こそ、「黒人たちが実際に所有し、完全にコントロールする最初のコミュニティであり、公的組織であった。」「黒人教会で、認識されているとか、『一かどの者』とみなされる機会は、多くの黒人の誇りを刺激し、自尊心を護った。」しかし、彼らは魂の王国から、日々の諸問題と闘うためにより強力な勇氣や確信を持つてつねに現実の世界にもどってきたのである。

四 むすびに

マブルはキリスト教が西洋史のなかで果たしてきた役割には革新的側面と反動の側面の両面があると述べ、黒人宗教もその例外ではないと論じている。白人の宗教であれ、黒人の宗教であれ、魂の救済にいたる来世性と、現実の生活、すなわち現世性との論理整合性を求めることは、ある意味では永遠の矛盾であるかもしれない。しかし、神の前の自由と平等というとき、黒人に対してつねに制限を設けてきた白人キリスト教と違い、白人キリスト教とアフリカの文化伝統を混合して形成された黒人宗教は、アメリカ黒人がもつとも困難な状況にあった奴隸制時代においてさえ、否、その時代においてこそもっとも宗教の本質を発揮し、現世における魂の解放と抵抗の理論的支柱になりえたという歴史を持っている。説教のなかでもっともよく語られる来世性ととともに、「精神的幸福以上のものを求める」現世性を黒人宗教は併せ持っているのである。

大移住期に北部シカゴにやってきた黒人移住者たちは、この大都市に到着した時点から、南部で抱いていた期待とは異なる様々な困難に直面した。都会での生活が困難であればあるほど、来世性と現世性という二重性の両面が黒人教会で満たされる必要があった。そのとき黒人移住者は自

12 13 14' do., *Religious Bodies: 1926, Vol. 1*
(Washington, D.C.; G.P.O., 1930), Table 37 46 5 雜和 6 七
頁 24 頁。

- (8) The Chicago Commission on Race Relations, *The Negro in Chicago* (New York: Arno and New York Times, 1922, 1968), pp. 144-45 (34-CCR Report 4 5 頁); Robert Lee Sutherland, An Analysis of Negro Churches in Chicago (Ph.D. Dissertation, University of Chicago, 1930), p. 44; Drake, *op. cit.*, pp. 183-84.

- (9) CCR Report, p. 145.

- (10) 7 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
Sutherland, *op. cit.*, pp. 57-58; No. 1, Baptist (No special designation), Missionary Baptist, Primitive Baptist; No. 2, AME, AME Zion, Colored M.E.; No. 3, M.E., Episcopal, Presbyterian, Congregational, Disciples of Christ, Seventh-Day Adventists, Catholic (Roman), Lutheran, Church of Christ, Scientist; No. 4, Community Churches, Inc.; No. 5, Church of God in Christ, Church of Christ (Holiness USA), Church of Christ (No designation), Church of Living God, Church of God (Holiness), Church of God (No designation), Church of God and Saints of Christ, Apostolic and Pentecostal, Pentecostal Assemblies of World, Old-Time Methodist, Hollines (Miscellaneous Groups); No. 6, Spiritual and Spiritualist, I.A.M.E. Spiritual; No. 7, Cumberland Presbyterian, African

Orthodox, Christian Catholic, Others, Drake, *op. cit.*, pp. 183-4.

- (11) Sutherland, *op. cit.*, pp. 66-74; Drake, *op. cit.*, pp. 191-95.

- (12) Chicago *Defender*, February 24, March 3, 17, 24, 31, July 7, September 1, 15, 22, October 20, 27, 1917, March 30, October 19, November 23, 1918, April 5, May 17, 1919; Mattie Fisher, "Olivet as a Christian Center," *Mission's*, Vol. 10, No. 3 (March 1919), pp. 199-203; "Olivet-A Community-Serving Church in Chicago," *The Messenger* 6, (September 1924), pp. 282-87; Miles Mark Fisher, "Negro Churches in Illinois," *Journal of the Illinois State Historical Society*, Vol. 54, No. 3 (Autumn 1963), pp. 560-61; Chicago *Daily Tribune*, May 13, 1918, CCR Report p. 94.

- (13) James R. Grossman, *Land of Hope* (Chicago: University of Chicago Press, 1989), p. 156; William S. Braddan, *Under Three Banners* (Nashville, 1940), p. 249.

- (14) Joseph Bougere, Interview with Robert Mays, Chicago, March 9, 1938, Illinois Writers Project, The Negro in Illinois, "Vivian Harsh Collection, Carter Woodson Regional Library, Chicago (34-IWP Papers 4 5 頁); Sutherland, *op. cit.*, p. 97.

- (15) E. Franklin Frazier, Negro Family in Chicago (Chicago: University of Chicago Press, 1932), p. 74.

- (16) CCR Report p. 176; *Defender*, March 10, 1917;

シカゴ黒人ゲートの黒人教会（竹中）

- Emmett J. Scott, *Negro Migration During the War* (New York: Oxford U.P., 1920), p.40; A. Williams and E. Jennings, *Untitled report on Monumental Baptist Church*, IWP Papers; Mays and Nicolson, *op.cit.*, p.98; Drake, *op.cit.*, p.149; Sutherland, *op.cit.*, p.44.
- (17) Sutherland, *op.cit.*, p.84; Grossman, *op.cit.*, p.159.
- (18) Mays and Nicolson, *op.cit.*, p.225; Sutherland, *op.cit.*, p.16.
- (19) *Untitled report of IWP Papers*; Sutherland, *op.cit.*, pp.84,118; *Defender*, September 10; Drake, *op.cit.*, p.195.
- (20) Mays and Nicolson, *op.cit.*, pp.120-21,279,132,281.
- (21) Marable, *op.cit.*, p.335; Milton C. Sernett, "When Chicago was Canaan," unpublished paper.

（本稿は一九八八―八九年にフルブライト客員研究員としてシカゴ大学歴史学部で研究した成果の一部である。）

（北九州大学）